

朝霧高原茅場の景観

根原区・朝霧高原活性化委員会

はじめに

朝霧高原茅場は、ふるさと文化財の森に設定され文化財建造物修復用の茅を産出する茅場となっていますが、住民の高齢化や人口減少など火入れの継続が困難な状況があります。このため、草原の有する水源涵養機能や CO2 吸収などの多面的機能や生物多様性に着目し、草原維持の認識を住民や市民の方々、ボランティアの方々、行政の方々と共有する取り組みを進めております。

この中で、朝霧高原茅場の草原景観保護について認識を深め、草原を地域資源としてその活用方法を考える一助とするため本冊子を取りまとめました。

朝霧高原茅場を将来に亘って維持するために、皆様方のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

平成 30 年 2 月

根原区・朝霧高原活性化委員会委員長
吉川 清人

目次

はじめに・目次	2
1. 朝霧高原茅場の概要	3
2. 国立公園の景観維持	4
3. 草原景観の特徴	6
4. スキ草原を楽しむ	7
5. 草原景観の再生	8

1. 朝霧高原茅場の概要

1) 朝霧高原茅場の位置

朝霧高原は富士宮市北部、富士山西斜面の緩やかで広大な裾野に位置し、西側は急峻な毛無山を中心とする天子山地によって区切られている。かつては朝霧高原全体に茅場（ススキ草原）が広がっていたが、現在は「道の駅朝霧高原」西側から根原集落東側にかけての地域に分布している（図1）。

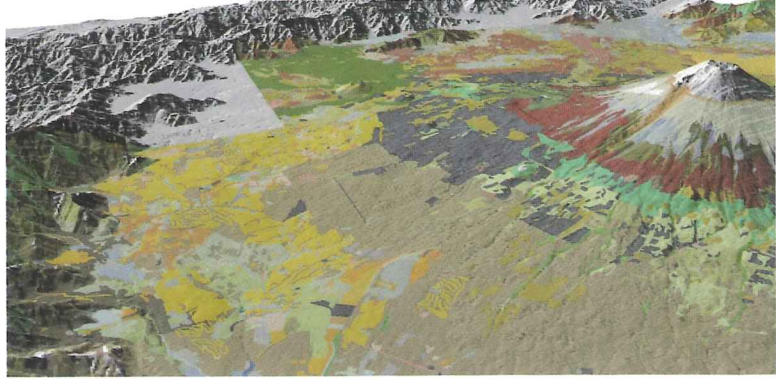


図1 朝霧高原の土地利用図(3D)

2) 朝霧高原茅場を取り巻く環境

朝霧高原の自然環境の大半は、人間の働きかけによって生まれる「二次的自然」であり、農林業政策や人々の生業など社会的・経済的環境が変わると景観も変化する。

朝霧高原の茅場が大幅に減少した理由は次の3つである。1つは、戦後開拓農家が朝霧高原に入植し、酪農のための人工草地（外来牧草による草地）が増えたこと。これによって冬期でも青々とした牧場の草地景観が拡大した。2つ目は、戦後の木材需要増に伴いスギ・ヒノキの植林による人工林化（拡大造林）が進んだこと。緩やかな地形条件により朝霧高原は一大林業地になっており、これによって黒々とした常緑針葉樹の一斉林の景観が広がった（写真1）。3つ目は、地域住民の過疎化・高齢化などにより茅場の管理（火入れ等）が滞ったこと。それにより植生遷移による樹林化が進み、現在は落葉広葉樹を中心にアカマツ等が混交した中低木の樹林地が広がりつつある（写真2）。



写真1 常緑針葉樹の一斉林

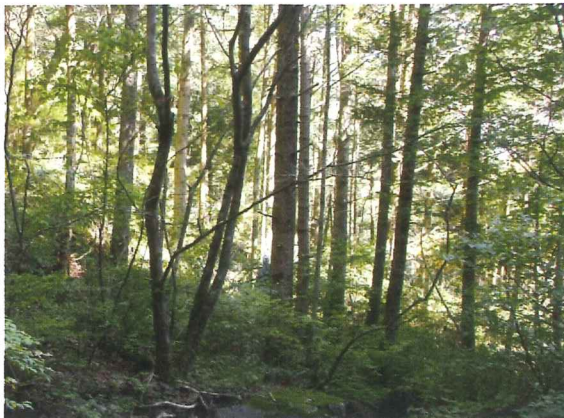


写真2 樹林化が進む落葉広葉樹林

こうした変化の中で、火入れ作業や採草によって維持管理される茅場の環境はかつての朝霧高原の環境を今日に伝える貴重な存在となっている。

さらに近年は、広大で四季の変化に満ちた草原の景観や自然環境が観光資源・地域資源としての価値を有するようになり、道の駅などの観光施設が設けられたり、観光道路を「景観体験の場」として位置づけ、沿道の景観を整備しようという動きもみられるようになった。

2. 国立公園の景観維持

1) 富士山麓の草原景観

かつて日本の山地には多くの二次草原が分布していた。茅葺き屋根の材料や家畜の飼料を得る場、また家畜の放牧の場として地域住民の共有財産（共有地、財産区）などとして管理されてきた。とりわけ緩やかな地形が広がる火山裾野にはまとまった草原景観がみられた。

昭和初期にはわが国の優れた自然景観を観光やレクリエーションのために保全活用しようという国立公園の制度が生まれた。手つかずの原生自然の景観と並んで、阿蘇山周辺の大草原に代表される二次草原の景観もその価値が評価され、国立公園に指定されていった。

富士山も旧陸軍の演習場問題などで主要国立公園より若干遅れたが、1936（昭和11）年に国立公園に指定された。富士山の山麓部はかつて「草山」と呼ばれたように広大な二次草原が広がっていた（図2）。特に東側には草原の多くが分布したが、旧陸軍の演習場として使われていたため、国立公園指定からは除外された（現在も自衛隊の東富士演習場などとして使われ、国立公園から除外されている）。こうした経緯から、西側山麓に位置する朝霧高原の草原景観は、国立公園の貴重な景観要素となっている（写真3）。

図2 富士山空間模式図（中山 2013年）

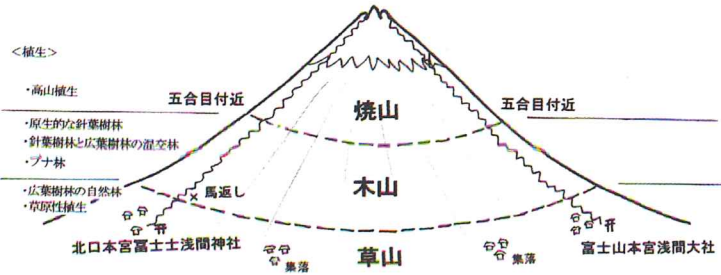


写真3 昭和39年の朝霧高原

2) 公園道路からの景観

私たちが国立公園などの自然風景地で景観を味わう際、ビジュアルな側面からの景観構造をみると、人々から眺められる側としての草原や森林などの「景観対象」と、展望台などの人々が景観を眺める場所としての「視点場」の双方から成り立っていることがわかる。モーターリゼーションが普及した今日では車から自然景観を眺めることが多く、展望台などと並んで道路そのものが重要な視点場となっている。国立公園などの自然公園において車から景観を眺めることを意識して計画・整備された道路を「公園道路」と呼ぶが、朝霧高原を南北に走る国道も観光地としての価値が増すにつれ公園道路としての役割が重視されるようになってきている。

こうした状況から、車から雄大な景観を眺めたり、走行に伴う連続した景観変化（シーケンス景観）を楽しむ朝霧高原の「景観体験」に配慮した沿道の景観整備が行われるようになった（写真4）。

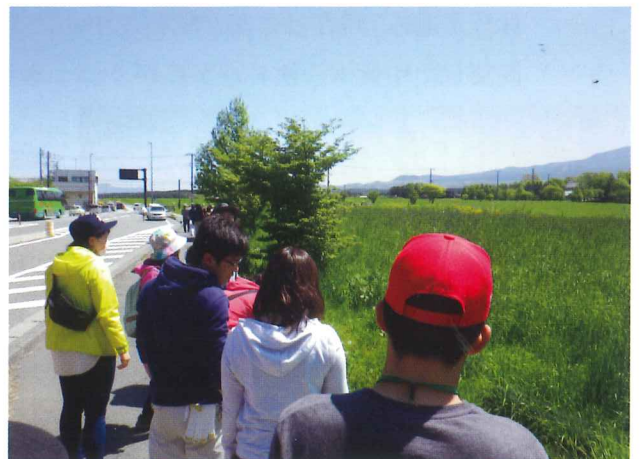


写真4 さわやかパーキングから望む牧草地

具体的には、景観の質を損ねる看板や電柱など「景観阻害要素」の除去や改善、眺望を遮るブッシュなどの刈り払い、建築物など構造物の設置規制や外観デザイン基準（色彩、形、材質など）の設定等々、景観の質を向上させる対策（朝霧地区景観形成ワークショップ会議で実施した集約案内サイン、塗装、風景阻害物件であった県の歓迎塔撤去など）がなされるようになったほか、車を止めて景観を鑑賞するスポットの整備なども実施されている。

3) 草原景観の維持

朝霧高原には、火入れなどで維持される「茅場の草原」（ススキ草原）（写真5）と、酪農に伴う外来牧草からなる「人工草地」（牧草地）（写真6）の2種類の草原景観がみられる。

前者の「茅場の草原」の景観は火入れや採草などが滞ると忽ち植生遷移が進んで樹木等が進入し、ブッシュや樹林地へと変化していく。したがってそれを維持していくには定期的な維持管理を継続していく必要がある。しかし、最大の障害は地域住民の過疎化・高齢化等による管理作業の担い手不足であり、従来の方法に加えて新しい支援の方法を導入していく必要がある。朝霧高原では現在行政による朝霧高原草原の火入れ事業、民間組織による茅場の多面的機能と生物多様性の調査と啓発事業などを実施しながら新しい維持管理体制を模索している（写真7）。

後者の「人工草地」（牧草地）の景観は酪農に携わる農家によって維持管理されているため、酪農の活性化が必要である。純粋な酪農だけでは経済的に厳しい状況に置かれており、観光活動との連携による支援と同時に、景観阻害要素（酪農施設等の外観デザイン）への配慮を要請していくことが重要であろう。



写真5 茅場の草原（ススキ草原）



写真6 人工草原（牧草地）



写真7 茅場の防火線焼き

3. 草原景観の特徴

1) 草原景観の四季

半自然草原ともいわれる茅場の草原は、ススキをはじめ火入れや採草に耐える多様な植物が生育しているため、景観面でも四季の変化に富んでいる。

早春（4月上旬）、まだ枯れ草状態で植物の芽が動く前に火入れが行われる。キツネ色だった草原にパチパチという大きな音とともに炎と煙が高く立ち上り、真っ黒な焼け跡へと変化していく。この野焼きは春を告げる風物詩であると同時に、草原の森林化を止める重要な作業でもある（写真8）。

ゴールデンウィークが近づくと真っ黒な大地から一斉に植物の目出しが始まり、瞬く間に緑の草原へと変化していく。



写真8 草原の火入れ（4月上旬）



写真9 火入れ後に咲くキスミレ

まだ丈の低い草原の地表には日照を好むミツバツチグリやキスミレの黄色い花、ワラビやウドなどの山菜も目立つようになる（写真9）。また、火入れの炎に耐えた点在するカシワの木から銀白色の新芽が芽吹く時期でもある。

晩秋から初夏にはススキを基調とする明るい緑の草原となり、その中にカララナデシコなど様々な植物の花が見られるようになる。特に浅い谷筋など湿った場所にはヨシなど草丈の高い植物が繁茂し、キスゲなどの希少な植物も花を咲かせる。

お盆を過ぎた頃から、秋の気配が漂うようになり、オミナエシやサワヒヨドリ、ヤマハギなど秋の花々が目立つようになる。更に秋が進むと草原をススキの穂が一面を覆うようになり、ウメバチソウやヤマラッキョウ、そして11月のリンドウで秋の花は終わる。

この頃、春の野焼きに備えて「防火帯」の刈り払いが行われる。また、屋根葺き材料としてのススキの刈り取りが行われる時期でもある。

初冬になるとススキやネザサを中心とした草は枯れてキツネ色の草原へと戻っていく。



写真10 初冬の朝霧草原茅場

2) ススキ草原と牧草地

前述したように茅場の草原（ススキ草原）は多彩な四季の変化がみられるが、人工草地（牧草地）の変化はそれに比べると小さい。しかし大きな違いは、外来の牧草であるため比較的寒い時期から青々とした草原景観がみられるということであろう。また、牧草地として整地され構成種も揃っているため「一面の均質な緑が広がる草原景観」が生まれるのが特徴である。

どちらの景観も朝霧高原を特徴づける草原景観であり、それぞれの場所に応じた維持管理と活用を行うことが重要である。

4. ススキ草原を楽しむ

1) ススキ草原の楽しみ方

ススキ草原はその景観が四季をとおして様々に変化する。火入れ後の野草の芽生え、青々としたススキ草原、秋草の開花、銀色に輝く穂の波、そして茅刈りの風景などである。朝霧高原茅場は、標高 970m～870m、東西約 2km、南北約 2km で面積 152ha である。標高の高い北東部は、溶岩の流下によって小丘や谷が入り組んだ変化に富んだ地形で痩せた土地となっている。谷を挟んでダイナミックな富士山を眺望することができる。国道 139 号を挟んで南西部は比較的なだらかで大きな凹地地形となり、根原大根を栽培するなど肥沃な土地となっている。良質な茅を刈ることができる。凹地からは横に広がる雄大な富士山を見上げることができる。

また、草原の中には根原の人々の暮らしの歴史を物語る馬頭観音などの石造物を見つけることができる。雄大な草原景観や季節で変化する植物や動物が生息する自然環境を楽しむことができる。さらには地域の歴史文化などとふれあうことができる空間となっている。ふれあいウォークの他に茅刈り体験、茅やススキを使ったクラフト体験などを楽しむことができる。

このような草原の魅力を表現する呼称として「朝霧草原」と呼ぶようになっている。周囲には東海自然歩道や道の駅朝霧高原等がありこれらと合わせて楽しむことが可能である。

2) ススキウォークコース

道の駅朝霧高原を起点として魅力的なウォークコースは、①北部地域 植物と触れ合うコース (4km 程度)、②南部地域 広大なススキ草原を楽しむコース (5km 程度)、③東海自然歩道と草原を合わせて楽しむコース (6km 程度) などが想定される。



図3 ススキウォークコースの魅力

5. 草原景観の再生

1) 朝霧高原のブランドイメージの創出

戦後、農家が入植し酪農振興の結果として生まれた牧場（牧草地）の景観、および野焼きによって維持されてきた茅場（ススキ草原）の景観は、今日では重要な観光資源・地域資源となってきた。視野を広げて広域的にみると、温暖な東海地方や静岡県においては、これらのエキゾチックなイメージをもつ地域景観は富士山の眺望や高地の冷涼な気候、湧水群などと相まって数少ない独特の朝霧高原イメージとして人々に印象づけられ、一つのブランドとして定着しつつある。

富士宮市ではこうした資源や地域イメージを活かして朝霧高原一帯を舞台とした「フードバレー構想」を展開し、地元産農産物のブランド化、新しい製品の開発やそれに関連する企業の誘致、さらにそれらにレジャー・レクリエーション施設を加えて総合化した魅力ある観光地づくりに取り組んでいる。

2) ブランドイメージを支える景観整備

こうしたブランドイメージを支えているのは「景観」である。さらにその基調にあるのは2種類の草原景観である。

茅場（ススキ草原）については維持管理の運営体制をさらに充実させるとともに、管理が滞ってヤブ化している草原は道路沿線など優先度の高い地域から再生していく必要がある。牧草地についてはブランド化や観光活動と連携した酪農のいっそうの振興を進めると共に、景観に配慮した施設整備が求められる。

同様にレジャー・レクリエーション施設を含めて誘致する企業等に対しては景観を強く意識した施設整備を求めていくことが必要であろう。

参考文献

『富士山は里山である』農がつくる山麓の風土と景観 中山正典 2013年 農文協

朝霧高原茅場の景観

平成30年2月17日発行 非売品

執筆者：東京農業大学名誉教授 麻生 恵 写真提供：麻生恵、木村悦之

編集・発行：富士宮市根原区

〒418-0101 富士宮市根原区 527 TEL054-452-0778

印刷：ラスクル株式会社

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-24-9 TEL03-4577-9200

この冊子は、文化庁事業「茅葺き文化・文化財保護に関する普及啓発事業」により作成しています